

2020年5月10日 礼拝説教要旨

詩編講解説教14「絶望の果てで」

詩編14：1-7、ローマ3：21-26

第14編の前半はかなり悲観的な内容となっています。「神を知らぬ者は心に言う。『神などいない』と。人々は腐敗している。忌むべき行いをする。善を行う者はいない。主は天から人の子らを見渡し、探される。目覚めた人、神を求める人はいないか、と。だれもかれも背き去った。皆ともに、汚れている。善を行う者はいない。ひとりもない」（1～3節）3節「善を行う者はいない。ひとりもない」パウロはローマの信徒への手紙においてこの部分を引用しています。それは言わば人間を全否定することであって、パウロもこの詩人もその点で同じところに立っています。それは言い方を換えれば人間に絶望することです。旧約、新約を貫いて、聖書の信仰は基本的にそういう人間観を持っています。そこを通らないと実は信仰の核心部分に触れることができないのです。結論から申しますと、聖書はそこに人間の本当の救いを見えています。

では人間に絶望するとはどういうことでしょうか。人間に絶望するということは現代社会ではまったく受け入れられないでしょう。世間の人々はそれとは正反対のことを主張します。まだまだこの世も捨てたものじゃない。いい人間もいっぱいいる。人の善意、情けに弱い。人々はそういう話を好みますし期待しています。特にこういうご時世になると人の善意、善行が注目されます。例えば、やれ誰がどれくらい寄付したとか、そういうことがメディアで取り上げられ賞賛されるようになります。それを見て「すごいなあ、良い人間もいるもんだなあ」と多くの人々は思うでしょう。でもその人が自分の財産のすべてを寄付したのなら分かりますが、福音書が伝えるレプタのやもめの話にあるように「有り余る中から」（マルコ12：44）ささげても、それはむしろ当たり前のことであって賞賛に値することではありません。こういう話をするとこの牧師はひねくれていると批判されそうですが、でもそれだけ世の中の人々は人間に望みをかけたいのです。

実はこのことは信仰者も例外ではないのです。わたしたちもまた神さまを信じていると言いながら、心のどこかで自分に期待し、望みをかけ、救いは自分の成果だと考えているところがあります。神さまではなく、人間中心、自分中心なのです。かつて渡辺善太という日本を代表する説教者がおりました。彼の残した説教の中に「人間的立場からの飛躍」という題の説教があります。その説教の冒頭、渡辺先生はこういうことを言われます。キリスト信者は大きくわけて二つの立場にわけることができる。一方は人間的な立場に立って神を信じる人。つまり自分が選んだ神を信じるという立場。他方は、神的な立場で神を信じる人。それは神がわたしを選ばれ見出してくださったという信仰に立って神を信じること。結論としては、人間的立場の信仰から、わたしを選ばれた神さまを中心にする信仰へ飛躍しなければならないと言われます。

もう一人、武藤健（たけし）というメソジストの牧師がおりました。その武藤先生の説教で「主客転倒」という題の説教があります。その中で先生は「はじめはわたしがキリストを信じるのです。キリストは完全な人だ。立派な人格だと、そうわたしが信じるのです。そのかぎりにおいてはキリストはわたしにとって客であります・・・しかしだんだん経験が深くなりますと、いや、そうではない。わたしが信じるのではなく、信じるようにわたしがつかまえられている。わたしがキリストを信じたのではなくて、キリストがわたしを信じ愛してくださったと気づくのです」そこで主客が入れ替わる。ここが重要だと武藤先生が言われるのです。

わたしもそういう内容を説教で語ることがありますが、なぜそういう説教が教会で繰り返し語られるのか。それは教会と言えども、信仰者と言えども、神さま中心ではなく、人間中心に信仰を捉えているからです。おこがましくも自分が神さまを信じていると考えている。信仰は自分の業であり救いはその成果だと。でもそれはまだ本当の意味で神さまを信じていない。むしろ自分を信じているということ。その自分が絶望し、打ち砕かれなければならない。そうでなければ、いくら教会で神さまの愛や恵みを教えられても「誰の話?」「自分と何の関係があるの?」ということになるのです。神さまを信じるというのは、そういう自分を乗り越えていくということです。

そういう意味で、わたしたちもまた「神を知らぬ者」になり得るのです。7節を見ますと「捕われ人を連れ帰られるとき」とあります。ここから、この詩の背景にはバビロニア捕囚があるとされます。神の民イスラエルが異教の地に連れて行かれてしまう。それはイスラエルにとっては信仰の危機でありました。その土地の宗教の影響を受けるのです。そしていつの間にか「神などない」と言うようになってしまう。それはイスラエルの神、天地万物をお造りになられた真の神さまを否定することです。そういう現実を見て、この詩人は絶望しているのです。「だれもかれも背き去った」と。これは異教徒や無神論者に向けて語られた言葉ではありません。神の民イスラエルに向けて語られた言葉です。だからこそ深刻なのです。信仰者の中にも信仰が失われたと言っている。神さまではなく、自分を信じている。ではもはや希望はないのでしょうか。

しかしここからが希望なのです。「神は従う人の群れにいます。貧しい人の計らいをお前たちが挫折させても、主は必ず、避けどころとなってくださる」(5、6節)だれもかれも背き去ったと思っても、神さまが避けどころとなってくださり、そこに神さまに従う人々の群れを起ししてくださるという約束です。そこに望みが残されている。それは7節にあるように、具体的には捕囚からの帰還を意味しているでしょう。けれどもわたしたちイエス・キリストの救いを信じる者にしてみれば、それは罪の支配から解き放たれて、キリストの体である教会に集められることを意味しています。そこに希望がある。実際、「避けどころ」と訳されている言葉は、ギリシア語の旧約聖書、七十人訳では「希望」(エルピス)と訳語を当てています。この絶望の果てに、わたしたちはなお希望を望み見ることができる。それはまだまだ人間の中に可能性が残されているということではなく、人間に絶望した先に、神さまの救いとしての希望が見えてくるのです。それこそがキリストの十字架とよみがえりの御業を指し示しています。